http://hokkaido-poland.com/pole.html

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」

第２１号　1992, 12, 09

発行
北海道ポーランド文化協会
〒060 札幌市中央区南2西2
河合楽器製作所北海道支社内
電話 011-231-8661
FAX 011-221-4936

第六回総会終わる

――一九九二年～一九九三年

北海道ポーランド文化協会第六回総会が、去る一一月九日、すみれホテルで開かれた。

総会に先立って短編映画二編が上映された。

ウッチ映画大学卒業監督作品で、一つはアンジェイ・ワイダ監督「不良少年」、他の一つはイェジ・スマリコフスキ監督「恋愛詩」。

続いて総会。遠藤道子副会長の挨拶の後、一九九一～九二年度事業および決算報告、そして一九九二～九三年度の事業計画と予算案が提案され、いずれも了承された。

また運営委員については、二年の任期の半ばであるので、全員、任期終了まで続けるということで出席会員の了承を得た。

総会のあと、恒例の懇親会で、最初に田口綾子さんのピアノ演奏が行われた。

ショパンの「三つのエコセーズ作品七二の三」、「ワルツ イ短調作品三四の二」、「ポロネーズ イ長調"軍隊"作品四〇の一」の三曲が演奏された。

このあとポーランド人のお客様をまじえての会食が楽しく・和やかに九時近くまで続いて解散。一つ残念なことは、参加者が少ないこと。会員同士の交流を深めるためにも、せめて年に一度の総会には、たくさんの方が出席して下さると、もっと盛り上がることと思う。

総会に提出され承認された議題の概略は次の通りです。ここに報告いたします

一九九一年度事業報告

《主催事業》

◇第一五回例会「クレセントムーン」絵本原画展、一一月一日（金）より二四日（日）まで天神山国際ハウスロビー、および講演会「ポーランドの文化とリトアニアの文化」スタシス・エイドリゲヴィチウス氏、一一月九日（土）札幌市教育文化会館

◇第一六回例会　講演とビデオ映写、講演「ポーランド文学の新しい潮流」カナダ・アルバータ大学教授エドワード・モジェイコ氏、ビデオ「マゾフシェ舞踊団ハイライト」一月二五日（土）札幌教育文化会館

◇ポーランド大使歓迎パーティー、五月二二日（金）すみれホテル（五三名出席）。ピアノ：名取百合子氏によるショパン作曲マズルカ作品三二の二とバラード作品四七の演奏。

《後援事業》

◇ポーランド国立放送交響楽団演奏会、一一月一九日（火）札幌市民会館ホール

◇ポーランド舞踊とショパンの夕べ二月五日（水）～七日（金）道新ホール

その他にポーランド語講習会を三期実施、会誌ＰＯＬＥ発行を三回発行。

一九九一年度会計決算

〈収入の部〉

会費	五四〇、〇〇〇円
その他	九、三七六円
仮払金返却	一〇三、四〇〇円
繰越金	六二九、二二〇円
合計	一、二八一、九九六円

〈支出の部〉

事業費	四〇一、一一七円
連絡費	七八、九三五円
会合費	一三六、九四一円
事務費	一三一、三〇〇円
仮受金返却	四三、五〇〇円
繰越金	四九〇、二〇三円
合計	一、二八一、九九六円

一九九二年度事業計画

《主催事業》

映画会、講演会、音楽会などを例会として四回程度開催。ポーランド訪問（北海道・ポーランド文化交流事業として計画）。そのうち

◇第一七回例会は講演会とビデオ映写、HBCの安藤千鶴子氏による「ポーランドの女たち」を一〇月二〇日（火）に札幌教育文化会館で実施済み。

◇第一八回例会は（POLE本号掲載の）ポーランド映画特別上映会として準備中。

《後援事業》

ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団札幌演奏会、一一月一七日（火）をはじめ音楽会、展覧会など適宜おこなう

その他、ポーランド語講習会年間三期程度実施し、会誌POLE発行を年間四回程度発行する。

一九九二年度予算

（収入の部）

会費	六〇〇、〇〇〇円
その他	一〇、〇〇〇円
繰越金	四九〇、二〇三円
合計	一、一〇〇、二〇三円

（支出の部）

事業費	三五〇、〇〇〇円
連絡費	八〇、〇〇〇円
会合費	一四〇、〇〇〇円
事務費	一〇〇、〇〇〇円
予備費	一〇、〇〇〇円
繰越金	四二〇、二〇三円
合計	一、一〇〇、二〇三円

会費について

例年会費は金額で約八〇％納入の実績をあげています。ポ文協のような会としてはかなりの好成績といえますが、なおこれを一〇〇％に近づけたいと思っています。会員の皆様のご協力をおねがいします。協会の必要経費はほとんど皆様の会費によりまかなわれていますが、年々繰越金をくいつぶす状態が続いています

会費は普通会員二千円、維持会員（一口）五千円、団体会費（一口）三万円となっています。協会の会計の健全さを維持するために、普通会員から維持会員への変更という好意あるお申し出を歓迎します。また、いっぽう維持会員で入会したが普通会員に変更したいというご希望も、ご遠慮なくお申し出ください。

（事務局長　吉田宏記）

第１８回例会　ポーランド映画特別上映会

KRZYK［クシック〈叫び〉］

監督・脚本／バルバラ・サス・ズドルト
撮影／ヴェスワフ・ズドルト
美術／イェジィ・サイコ
音楽／クシストフ・グラボフスキ
製作主任／リシャルト
キャシュト／ドロタ・スタリンスカ、スタニスワフ・イグァル、
クシシュトフ・ビエティンスキ、アンナ・ロマントフスカ
一九八二年作品（上映時間九六分）

【日時】一二月一九日（土）入れ替えにて四回上映
上映開始　一三時〇〇分、一五時一〇分、
一七時二〇、一九時三〇分より

【場所】シアターキノ（南三西六長榮ビル二F）

【入場料】ポ文協会員は例会参加費として八〇〇円

シアターキノ（ポ文協会員中島洋さん）の協力により、第一回東京国際映画祭出品作の興味あるポーランド映画の鑑賞会を例会として開催することになりました。多数の会員が知友を誘って参加してくださるよう、ご案内いたします。

同封の会員用入場料割引券をご持参していただくと、同伴者も含めて入場料八〇〇円となります。なお、会員外の入場料は一二〇〇となりますので、入場割引券をお忘れなく。

バルバラ・サス監督の略歴

一九三六年十月十四日ウッチに生まれる。

一九五二年～一九五九年　ウッチ映画大学の監督部門で学ぶ。在学中の一九五五～五六年　習作「デコレーション」を作る。

一九八〇年「愛なしで」でグダンスク映画祭デビュー作品賞を受賞。一九八二年「クシック（さけび）」を製作。

（ものがたり）不良娘のマリアンヌが刑務所から出所し、保護官から指示されたとおり、あるデラックスな老人ホームで掃除婦兼雑役婦として働き始める。また、ネストルの身の回りの世話もする。ネストルは感じの好くない老人で彼女に対して容赦なく悪意をぶつけ、あからさまに侮辱する。

仕事が終わると、彼女は毎日ワルシャワ旧市街ブラガにあるむさ苦しい自宅に戻る。そこには酔っぱらった母と、その情夫とが居て困ってしまうのだ。

マリアンヌは、何としてでも自分の生活を変えたいと願っているのだが、どうすれば良いのかわからないでいる。

老人ホームで看護夫をしている若い男に彼女は出会う。彼にもまともな家はないけれども、じきに住宅共同組合のアパートに入居できる見込みである。これがマリアンヌの最後の希望となる。

この年一九八一年は国じゅうに緊迫感がみなぎっており、苦情を持ち込んでは補償してもらおうという人々がどこにでも居た。老人ホームには二人の若い労働組合活動家がやって来て、調査を始める。嫌疑の的はネストルである。

ネストルはかって高級官僚であって、在職中の汚職の責任を回避するために、今は社会的に安全な施設に隠れているのだ、というような申し立てが広まる。マリアンヌはわずか一ヶ月程前に刑務所の門を出たばかりだが、この事件が紛糾するにつれ、あれこれ思って混乱してくる。そして徐々に、社会主義こそが必要なのだと予感するようになる。

彼女と恋人との仲はもはやうまくいかなくなっている。ある日、新しいアパートへの希望が挫折してしまう。絶望したマリアンヌは、自分やもとの恋人のように、人が家を持てないのは、全てネストルのような男の責任であると思い込む。

彼女はある夜老人ホームに忍び込み、ネストルと言い争った後、彼を殺してしまう。

夜が明けてあさになる。

なかば正気を失ったマリアンヌはよろよろと玄関へ出て来る。そこで看護長から、実はネストルが疑いをかけられているような人物ではなく、調査は根拠のないうわさをもとにして行われたのだと知らされる。

マリアンヌは自分の犯した恐ろしい過ちに気づき、悲痛な叫び声をあげる。

交流が音楽を豊かにする

――カジミェシ・コルト氏に聞く

さる十一月十七日、公演のため来道されたワルシャワ・フィルハーモニー芸術監督のカジミェシ・コルト氏にお話をうかがいました。

コンサート当日の朝という忙しい時間の合い間のインタビューでしたが、コルト氏は丁寧に質問に答えて下さいました。

♪北海道は一九八八年四月の公演に続いて二度目の来訪ですが、印象はいかがですか。

前回は春、今回は雪の季節に訪れましたが、北海道は自然が美しく町並みもきれいです。とても感じがよいのです。

♪前回のプログラムにはショパンのピアノ協奏曲第一番がありましたが、今回は二番を演奏されますね。一番（ホ短調）と二番（ヘ短調）とでは演奏されるときに留意することが違いますか。

それは大変深い問題です。本を一冊書いても論じ尽くせないほどで、この短い時間に答えるのは難しいです。でも、一般的に言うと、両協奏

指揮者のカジミェシ・コルト氏（右）と通訳の熊倉ハリーナさん（左）。

曲は全く違った性格を持っています。二番の方は自由な演奏ができる余地のある部分が多いのに対し、一番の方は構成・形式がきっちりと仕上げられている作品なのです。そのように対照的ですが、無論、両曲ともすばらしい作品です。

今回演奏する二番については、ピアニストの遠藤郁子さんがすぐれた演奏でその本質を聴かせるでしょう。

♪ルトスワフスキがハンガリーのベラ・バルトークを追悼して作った「葬送音楽」がプログラムにありますが、どんな曲ですか。またルトスワフスキはバルトークを尊敬していたのでしょうか。

このルトスワフスキの曲は、聴き慣れないと少しわかりにくいかもしれませんね。正確に言うには難しいのですが、きっとルトスワフスキはバルトークを敬愛していたことでしょう。その理由として考えられることは、ポーランドにしてもハンガリーにしても、現代の音楽は民族音楽からインプレッションを得て創作されているので、そういう意味でも、ルトスワフスキとバルトークには相通じるところがあったのでしょう。

♪コルトさんはショパンコンクールの本選で指揮をされ、前回は審査員もつとめられましたが、日本の若いピアニスト達にアドバイスをお願いします。

ショパン・コンクールはフィルハーモニーホールで開催されるので、様々な形で参与しています。とくに、本選出場者とは必ずピアノ協奏曲を協演します。

実は、日本のピアニストたちには、アドバイスすることがないのです。というのは、日本人はとても賢明で、特に音楽的な才能に恵まれていると思うからです。一般に、日本のピアニストがショパンを演奏するときは、ポーランドのピアニストたちとは弾き方が違います。しかし、私は弾き方が違うことを嬉しく思います。

なぜなら、違う弾き方をすることで、ショパンの音楽はもっと国際的になり、世界に広がって豊かになるからです。どんな民族、どんな文化でもショパンの中に独特の魅力を見つけ出して、それを表現するのです。

もちろん、ショパンの曲を演奏するときに古典的に確立された模範（カノン）という宝物があります。それを日本人も長い時間のうちに身につけ、そのように弾きます。しかし、それ以外の部分では、自分の心で何かを感じ、その新しさを付け加えることによって、さらに宝を増すわけです。増した宝に、さらに世界の音楽家たちが独自の何かを加えて行きます。そうやってショパンの音楽は豊かになります。

♪ポーランドに関心を持っている北海道の人々にメッセージを

私は今回で日本に五度訪れていますが、日本のどこへ行ってもポーランドを好んでくれる人々の気持ちがすぐにわかります。それはとても嬉しいことです。そうした皆さんの思いにふれると、皆さんの前で演奏することが大きな喜びになります。感動するのです。

日本人はポーランドのことを好きだといわれますが、今ではポーランド人の多くも日本に関心をもっています。日本の文化だけでなく、日本の全般に対して尊敬しています。

だから、日本人とポーランド人は今や互いに関心を持ち合っている間柄なのです。私自身も、日本を何度も訪れることができて、とても嬉しく思っているのです。日本とポーランドとの間に交流があるのこと本当に喜ばしいことです。

＜インタビューの後書き＞話題は自然と音楽、ショパンのことに集中してしまいましたが、コルト氏が熱意を込めて語った「カージディ・ナルート、カージダ・クルトゥーラ・ズナーイェ・フ・ショペーニェ・インネ・アスペクティ……（どんな民族、どんな文化でも、ショパンの中に独特の魅力を見つけ出す……）」という言葉は忘れ得ないものです。折しも、四年前の公演でコルト氏と共に訪れたピアニスト、ピオトル・パレチニ氏も十一月十一日に札幌でリサイタルを開きましたが、こちらもすばらしい演奏でした。虚色を排するポーランド正統派のスタイルとはまた違ったパレチニ氏の演奏には、ショパンを骨董品にしておかず、作品の構造に挑み再解釈して生きたショパンを求め続ける探求的な姿勢があります。その真摯な演奏は深い感銘を与え、会場では小さな子供達も、いつまでも拍手を送っていました。

＜文責　三浦洋＞

カジミェシ・コルト
(Kazimierz Kord)

一九三〇年、ポーランド南西部のポゴルゼン生まれ。レニングラード音楽院、クラクフ音楽院に学び、クラクフ音楽劇場芸術監督ポーランド国立放送交響楽団芸術監督を経て、一九七七年六月よりワルシャワ・フィルハーモニー芸術監督。ポーランドにおいては「第一級文化芸術大賞」を授与された。一九七七年に初来日した。

「ポーレ」編集委員会
斎田道子・清水保子
吉田　宏
〔連絡先〕621-1738（斎田）

POLE 第 21 号（1992.12.9）目次

第 6 回総会（1992.11.9）報告…… 1
〈第 18 回例会〉ポーランド映画『叫び』特別上映会（1992.12.19）のお知らせ…… 2
三浦洋「交流が音楽を豊かにする～カジミェシ・コルト氏に聞く」…… 3